

Ⅲ 自己点検・評価委員会報告

1998年度に引き続き研究所の自己点検・評価が以下の委員によって実施された。2000年度に自己点検・外部評価を行うことを目標として、1999年度は国立大学の独立行政法人化の内容を検討した。そのために5月26日、国立歴史民俗博物館、篠原 徹教授による「独立行政法人化について」という題の所内談話会を開催し、所員に独立法人化の内容を説明して頂いた。

さらに大学評価機関（仮称）創設準備委員会中間報告と特に研究所にとって重要な分野別教育評価と分野別研究評価の内容、科学技術に関する行政監査で要求されている研究課題の評価内容を検討し、それらについてのまとめを2000年1月の協議委員会で報告した。2000年度には独立法人化を視野にいたした外部評価を実施しその結果をホームページに掲載することを予定している。

また研究所の広報活動の自己点検評価を実施

し、本年度はホームページの充実を図ることとした。ホームページに掲載するものとして、研究所の目的と目標、分野の目的、目標と研究活動やスタッフの情報、霊長類研究所年報、霊長類学系カリキュラム、すでに印刷されている自己点検・評価報告書「サルとヒトの接点を求めて」1996年、「明日の霊長類学の創造に向けて」1997年、「21世紀を目指す霊長研」1998年、また「サル類の飼育管理および使用に関する指針」と「野生霊長類を研究するときおよび野生由来の霊長類を導入して研究するときのガイドライン」等が考えられている。

自己点検・評価委員会：石田茂光・小嶋祥三・
櫻井芳雄・茂原信生・中村克樹・竹内克己・
林 基治・濱田 穰・平井啓久・松村秀一

（文責：林 基治）

Ⅳ COEとしての活動

1. COE形成基礎研究費

「類人猿の進化と人類の成立」

霊長類研究所および京都大学動物学教室の類人猿研究グループは、表記の課題で平成10年度から文部省科学研究費の交付を受けている。研究目的、申請の経緯等についての概要は昨年度（1999年度）の年報に記した。今年度は研究発足後の2年の経過について昨年度末に開催した研究成果報告会での発表を元にまとめた。

本研究課題は、人類の起源を考察するために、系統発生的に最も近縁の類人猿の進化を学際的に研究することを目的としている。チンパンジーを初めとする類人猿は、進化史上この系統からヒト科を萌出させたという点で、霊長類の中でも特別な地位にある。そこで類人猿研究グループを1)行動、生態、社会、2)形態、古生物学、3)認知、脳科学、4)遺伝学、分子生物学の四班にまとめ、研究計画の初期にはそれぞれの班の研究を深め、後半にはそれらの連携をはかることを考えた。

まず生態班では、アフリカの類人猿について

種内亜種間、種間の生態、社会、行動上の変異を比較するとともに、東アフリカのフィールドに大学院生を長期に派遣し「毛づくろい行動」を社会交渉との関連で解析する事を目的とした。また同行動を三種のアフリカ類人猿で比較する研究会を持った。ギニアのボソウ、タンザニアのマハレではチンパンジー社会の父子判定のための試料、糞、尿、体毛を収集した。新しいフィールドであるウガンダのカリンズでも試料を採集した。ここでは観察の歴史が浅く、詳しい観察は今後であるが、その前に遊動域におけるオス・メスの分布状態を明らかにするため、糞、体毛を用いたDNA分析による性別判別法を確立した。テナガザルの行動と遺伝分析ではヒト及びニホンザルで開発された、マイクロサテライト分析用のプライマーを調べテナガザルで有効なものを選別し、実際の遺伝分析を開始した。

形態班では、身体構成要素が骨格、脂肪、除脂肪軟部組織に大別されることに着目し、MRI等の非侵襲的方法でのそれらの測定を継続した。ヒトはその体脂肪率が非常に高いことで特徴づけら

れる。ヒトが過酷な環境であるサバンナへ進出した事と関連するのもかも知れない。チンパンジーの新生児の縦断的あるいは横断的な測定によって進化との関連での考察が可能になると考えている。アジアにおける類人猿化石の研究でも進展があった。タイにおける調査は、中国雲南省等と比べいわゆる荒れ地が少なく化石発掘場所は多くはないが、社会基盤の整備により、調査の効率は良い。事実北部タイで、タイ、フランスとの共同調査により1500万年前の類人猿の下顎大臼歯の化石が発見された。

類人猿の脳科学研究では、1)類人猿各種における前頭葉の割合や左右脳の大きさの比較等の脳のマクロな形態学、2)脳の各階層の厚みや細胞の大きさ等の脳組織すなわち細胞構築学的研究、3)機能MRIおよびPETなどによる機能画像研究、4)さらには左右脳半球の機能分化の研究等が考えられる。研究の1)と2)は例えば動物園等で死亡した類人猿の脳で研究が可能であるが、管理体制の違いがあり現在関係を作るべく努力している段階である。研究3)はPET等で半減期のきわめて短い放射性物質の投与が必要になるが、ヒトの場合と異なり実験動物の場合は殺処分という法規制があり、類人猿では事実上不可能である。しかしながら今年度はマカカ属サルを用いた予備実験により、試料の入手、法整備等の問題の解決によりこれらの研究が可能であることが示された。またチンパンジーの妊娠末期の死産児の脳について、ヒトからオランウータンまでにしか存在しないとされる、帯状回におけるSpindle Cellの存在を明らかにし、それらは胎生末期にすでに存在することを明らかにした。また動物の行動に大きな影響を与える生殖関連ホルモンを糞や尿等を用いて測定することを可能とした。今後フィールドでの分析が期待される。

分子生物学研究では、アフリカ類人猿、チンパンジーの3亜種、西と東のローランドゴリラについての地域変異の遺伝学的研究を進めた。まとまった結果としては類人猿のリハビリテーションセンターでの死亡個体から得た試料、したがって出自は完全に明らかでない試料であるが、現在すでに多くの体毛や糞の資料を収集しているので、今後それらの分析を進める。胃の蛋白分解酵素であるペプシンを、ヒト化により顕著となった肉食

との関連で遺伝子レベル、発現レベルで調べている。予測に反し植物食が基本の霊長類でその活性は高く、むしろ肉食動物で低いという結果が得られている。タンパク質という必須栄養素の消化吸収という観点から進化史との関連での考察に興味を持たれる。

霊長類研究所では二年続きでテナガザルの誕生があった。形態学的発達、運動機能、認知機能の発達等の研究が進行している。来年度はチンパンジーの誕生が予定されている。それらの新生児の発達研究は格段の進歩が期待される。

(文責：竹中 修)

2. 国際シンポジウム及びその他の学術集会

第2回COE公開シンポジウム報告

「マハレのチンパンジー：調査開始35周年を来年にひかえて」

日 時：1999年7月17日(土)

場 所：京都大学霊長類研究所大会議室

演 者：11名

参加者：約50名

1999年7月17日(土)午後、本研究所大会議室において、第2回COE公開シンポジウム「マハレのチンパンジー：調査開始35周年を来年にひかえて」を開催した。マハレのチンパンジーをめぐって、11名の演者によるさまざまな話題提供があった。プログラムは以下のとおりであった。なお講演要旨は『COE形成基礎研究・ニューズレター』第2号(平成12年2月25日発行)に掲載されている。

座長：川中健二(岡山理科大)

1. 西田利貞(京都大・理)「調査初期の研究とアルファ雄の歴史」
2. 乗越皓司(上智大)「植生、食べ物、遊動パターンおよび集団サイズ：国立公園開設前後の約20年間(1975-1998)におけるM群の変容」
3. 伊藤詞子(京都大)「果実食物のアベイラビリティとチンパンジーのパーティー・サイズ」

4. 上原重男(京都大・霊長研)「哺乳類相の変遷」
5. 保坂和彦(京都大・霊長研)「マハレのチンパンジーにおける狩猟・肉食行動の研究：長期調査と短期調査の相互補完について」
6. 福田史夫(共立薬科大)「マハレB群の行動域」

討論

座長：早木仁成(神戸学院大)

7. 坂巻哲也(京都大)「1999年度調査計画：チンパンジーの対面的相互行為分析の視点」
8. 座馬耕一郎(京都大)「1999年度調査計画：チンパンジーと外部寄生虫の関係」
9. 松本品子(京都大・理)「機会的な交尾にみられる雌の選択：繁殖行動の分析における長期継続データの重要性」
10. 中村美知夫(京都大)「Dunbarの言語進化仮説の検討：チンパンジーの毛づくろいのクリーク・サイズとヒトの会話のクリーク・サイズの比較から」
11. 葉風万舞句(京都大・霊長研)「チンパンジーの葉呑み込み行動：マハレとブドンゴの比較」

討論

コメント：竹中 修(京都大・霊長研)

世話人：上原重男・葉風万舞句・松本品子・保坂和彦

予備調査をへたあと、マハレのチンパンジーの長期研究は1965年に西田利貞によって開始された。4つの演題はそのような長期継続データにもとづく発表であった。チンパンジーの社会構造や社会行動を調査するなかで、生息地の生態学的な基盤を明らかにする意義が再認識されている。植物相や動物相の遷移および現存量(バイオマス)を把握し、チンパンジーの利用と重ね合わせようとした成果が3件発表された。マハレ生態系の解明とともに、ほかの調査域との比較研究がますます重要になってくる。そのような研究のひろがり念頭においた発表が2題あった。またマハレで研究を始める予定、あるいは開始したばかりの若手研究者からの研究展望の紹介が2題あった。

2000年に調査開始35周年をむかえるマハレでの研究は、マハレ生態系のなかでチンパンジーがしめる役割の位置づけと、長期調査がつづけられているほかのチンパンジー調査地との比較とい

う2つの局面で、今後の発展が期待されよう。

(文責：上原重男)

第2回サガ・シンポジウム

「大型類人猿の研究・飼育・自然保護」

日 時：1999年11月16日(火)～17日(水)

場 所：犬山国際観光センター「フロイデ」

参加者：約300名

昨年に引き続き11月16日(火)の午後1時から17日(水)午後6時半まで、犬山国際観光センターでおこなった。サガ(SAGA)は、「アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い」の英文略称である。京都大学霊長類研究所の教官が中心となって推進しているNPO活動である。

第一部は、「日本のチンパンジーの将来像」と題し、日本が保有する約400個体のチンパンジーの将来をさまざまな角度から考えた。企画者：松沢哲郎・松林清明(京都大学霊長類研究所)、吉川泰弘(東京大学・農学生命科学)、平井百樹(東京大学・新領域創成科学)、吉倉 廣(国立国際医療センター)、鈴木 宏(宮川庚子記念研究財団)、早坂郁夫(三和熊本霊長類センター)、吉原耕一郎(東京多摩動物公園)。

講演は、平井百樹：遺伝子研究とチンパンジー、鶴殿俊史：三和チンパンジーの繁殖実績と現状、小寺重孝：日本モンキーセンターの40年、ジョゼフ・アーウィン：アメリカの大型類人猿：現状と将来展望(英語講演)。

第二部は、五つの交流分科会をおこなった。A：動物園・博物館関係者の集い(担当：吉原耕一郎・伊谷原一)、B：野生保全に関わる集い(担当：山越 言)、C：ゴリラのブリーディングローンを考える(担当：山極寿一、吉原正人、黒鳥英俊)、D：エンリッチメントの若手研究者の集い：インターネットを使った動物園間の情報交換システムの構築に向けて(世話人：森村成樹・落合知美・前田典彦)、E：ビジネス・ミーティング(チンパンジー委員会)である。

第三部は、「類人猿飼育における環境エンリッチメントへのアプローチ」と題し、環境エンリッチメントのさまざまなくふうについて情報交

換した。東京多摩、札幌円山、横浜ズーラシア、林原博物館など、最近の新しい試みや将来構想についての話題である。企画者：吉原耕一郎（東京多摩動物公園）、伊谷原一（林原博物館）。

講演は、川端裕人：アメリカにおける環境エンリッチメントの展開状況、日橋一昭：飼育係の環境エンリッチメントに対する意識調査、島原直樹：多摩の新チンパンジー舎にかけた夢、佐藤正吉：多摩動物園の事例の設計する側からの一言、渡辺則行：札幌円山新類人猿舎への要望、堀田里佳：札幌円山の構想を図面に一設計者の苦勞、勝村実：横浜ズーラシアの動物舎設計、伊谷原一：展示のエバリュエーションについて。

第四部は、「野生保全への多様なアプローチ」と題し、野生生物保護の現状とさまざまな試みを紹介し方法論について考えた。企画者：上原重男（京都大学霊長類研究所）、山極寿一（京都大学・理）、山越 言（京都大学・AA地域研究科）、中村美知夫（日本モンキーセンター）。

講演は、小林聡史：誰のための自然保護か？—アフリカにおける保護区—、ジェームズ・ワキバラ：類人猿保護の一翼を担う地域住民：タンザニアの国立公園管理における取り組み方の変化（英語講演）、加納隆至：タンザニアにおける分布限界域のチンパンジーの現状と保護、橋本千絵：熱帯雨林の利用と保護との両立にむけて—ウガンダ・カリンズ森林の事例—、山極寿一：カフジ山で起きたゴリラの虐殺、山越 言：野生生物保全活動と地域住民のくらし—ギニア共和国ニンバ・ボソウ地域—の事例から—、鈴木 晃：オランウータン孤児の密輸入とインドネシア・カリマンタンの森林保護。以後のプログラムは、COE国際シンポジウム「類人猿の進化と人類の成立」（竹中 修大会委員長）と共同で実施した。

第五部は、ポスター・セッション。サガのための日本語発表は以下のとおり。

吉原耕一郎・島原直樹・佐藤正吉：東京都多摩動物公園のチンパンジーと新舎の構想、渡辺則行・堀田里佳：札幌円山動物園のチンパンジーと新類人猿舎の構想、堀 浩・勝村 実：横浜ズーラシアの動物舎設計、伊谷原一・森村成樹・不破紅樹：林原類人猿研究センターとチンパンジーたち、門田智恵美：わんぱくこうちアニマルランドにおけるチンパンジーの環境エンリッチメン

ト、堤 秀世：伊豆シャボテン公園における環境エンリッチメントの試み、宮沢 厚：那須ワールドモンキーパークとチンパンジーたち、熊崎清則・前田典彦：京都大学霊長類研究所のチンパンジー飼育施設と環境エンリッチメントの試み、道家千聡・松沢哲郎：飼育チンパンジーの食物の好み—100品目の嗜好テスト—、上野吉一・落合知美：カニクイザル・オス個体の再ペアリングの試み：プレイケージの利用、森村成樹・落合知美・前田典彦：インターネットを使った情報開示の実際例。

第六部は、記念講演。紹介：長谷川寿一（東京大学総合文化研究科）「オランウータンとわたし」を訳して。講演者：ビルーテ・ガルディカス、演題：野生オランウータンとともに—失われゆくエデンの園から—。

期間を通して、約300人の参加者があり、盛況だった。なお、昨年（1998年）の第1回サガ・シンポジウムの成果が、「霊長類研究」第15巻2号に特集号として公表された。参照されたい。

（文責：松沢哲郎）

COE国際シンポジウム

「類人猿の進化と人類の成立」

COE International Symposium “Evolution of the Apes and the Origin of the Human Beings”

日 時：1999年11月18日（木）～20日（土）

場 所：犬山国際観光センター「フロイデ」

参加者：130名

文部省科学研究費、COE形成基礎研究費「類人猿の進化と人類の成立」の援助による国際シンポジウムを、平成11年11月18日より20日までの3日間犬山市の国際観光センター「フロイデ」にて開催した。霊長類研究所の竹中 修を組織委員会委員長、同じく松沢哲郎および京都大学理学研究科の山極寿一をプログラム担当とした。霊長類研究所の林 基治、大澤秀行、濱田 稔、三上章允が会場、実際の運営、渉外を担当した。招待講演は国外から22名、国内からの4名に加え、一般参加は国外の7名、国内からの97名、合計130名におよんだ。国外からの参加者は10カ国を数えた。本邦に留学中の学生の参加等を加えると、外国か

らの参加は40名、15カ国を越えた。一方それらの若い研究者には、ポスター発表の場を提供し、加えて午後の一時間半程度をポスターの内容を口頭で発表する場を提供したのもシンポジウムを活発なものとした。

「人間とは何か」という命題は、科学技術の急速に進展する現代社会の中でひととき重要性を増してきている。近年の霊長類学は、霊長類の一員としてのヒトを他の霊長類との相違点および類似点から明らかにしてきたが、人類進化の過程が解明されたとは言いがたい。類人猿に関する研究はその行動や、生態、社会、認知機能に関して多くの研究がなされて来ており近年は遺伝子のレベルでの研究、近い将来には非侵襲的な測定手段による脳の研究も盛んになるであろう。

具体的には生態、行動、進化人類学(古人類学、分子)各8題ずつ計24題の発表とした。類人猿のフィールドでの生態や社会行動の観察研究では、テナガザルのベアー外婚も含む社会構造に関する新しい知見、野生オランウータンの道具使用等の発表があった。認知機能に関する研究では道具使用とシンボル使用について、ヒトと大型類人猿だけが可能であり、小型類人猿やマカクでは困難であることの実証と理論的説明として階層処理モデルの提出があった。ボノボの研究では近年注目されている「心の理論」と呼ばれる他者の心の理解についてもボノボでは他者の心の理解が可能であることを示唆する実験の紹介があった。

分子レベルでの研究では、類人猿の地域差、類人猿進化の過程でのゲノムの大きな変化、血液型糖鎖類人猿での進化と新しい系統樹の作成方法の発表が行われた。

本シンポジウムではテナガザルを含む類人猿に関して、広範な研究分野における最新の成果の発表があった。また本COE形成基礎研究費と同様に、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所においては、大型類人猿4種の飼育と、行動学から分子生物学にわたる広範囲の研究が企画され、アメリカニューヨークの研究グループは動物園の協力によりエイジング研究、死亡個体の脳の研究等、類人猿を対象とした大型プロジェクトが立ちあがりつつあり、それらの研究組織との意見交換も成果の一つであった。

招聘者とは昼食の時間帯をビジネスミーティ

ングと名付け、特に類人猿保護について今後の取り組み方について討議した。遺伝学的にも、行動でもこれほどヒトとは近い関係を持つ彼らの生息地の保全、またヒトに近いが故に実験動物として侵襲的な研究への使用を禁止する計画等、霊長類研究者として今後広くコンセンサスを得て行かなければならない問題について活発な議論が出来たことは有意義であった。

(文責：竹中 修)

ボノボの保護に関するワークショップ Bonobo Population and Habitat Viability Assessment Workshop

日 時：1999年11月21日(日)～22日(月)

場 所：犬山国際観光センター「フロイデ」

参加者：約20名

1999年11月21日、22日の両日、犬山市の国際観光センター「フロイデ」において、IUCN(国際保護連合)のCBSG(Conservation Breeding Specialist Group)ボノボの保護に関するワークショップ(Bonobo Population and Habitat Viability Assessment Workshop)が開催された。ボノボの研究者やボノボの保護関係者ら約20人が集まり、ボノボの生息地における現状とこれからの保護活動をどうするかという点を議論した。Vortexという人口動態シミュレーションにかけるために、今までの研究で得られたボノボの人口動態のデータを討議するワークグループと、ボノボの現在の生息状況と生存に対する脅威を検討するワークグループに分かれて話し合われた。最後に、全員でボノボの保護のための行動計画について話しあった。参加者は以下の通り。

Sally J. Coxe, Bonobo Conservation Initiative
Jef Dupain, Royal Zoological Society of
Antwerp

Linda Van Elsacker, Royal Zoological Society
of Antwerp

Joseph Erwin, Great Ape Aging Project
Barbara Fruth, Max-Planck-Institut Seewiesen
Shiho Fujita, Primate Research Institute,
Kyoto University

Takeshi Furuichi, Meiji-Gakuin University
Miya Hamai, Primate Research Institute,
Kyoto University

Chie Hashimoto, Primate Research Institute,
Kyoto University

Michael Huffman, Primate Research Institute,
Kyoto University

Gen'ichi Idani, GARI, Hayashibara Museum
for Natural Science

Takayoshi Kano, Primate Research Institute,
Kyoto University

Miki, Matsubara, Primate Research Institute,
Kyoto University

Paul Raffaele, Reader's Digest

Norm Rosen, Conservation Breeding Specialist
Group, IUCN

Sue Savage-Rumbaugh, Language Research
Center, Georgia State University

Ulle Seal, Conservation Breeding Specialist
Group, IUCN

Yasuko Tashiro, Primate Research Institute,
Kyoto University

Jo Thompson, Lukuru Wildlife Research
Project

Russell H. Tuttle, University of Chicago

Shigeo Uehara, Primate Research Institute,
Kyoto University

Richard Wrangham, Harvard University

Takashi Yoshida, Language Research Center,
Georgia State University

(文責：加納隆至)

COE国際シンポジウム

「認知と言語の系統発生」

COE International Symposium on "Phylogeny of
Cognition and Language"

日 時：2000年3月2日(木)～3月5日(日)

場 所：愛知県犬山市、犬山国際観光センター
“フロイデ” および京都大学霊長類研究所

参加者：約70名

プログラム

2000年3月2日(於：犬山国際観光センター)

Opening Remarks: Shozo Kojima (Director of
Primate Research Institute, Kyoto Univ.)

Plenary oral session 1

Chair: Tetsuro Matsuzawa (Kyoto Univ.)

James R. Anderson (Univ. Stirling) Self and
others in nonhuman primates: A question
of perspective?

Shoji Itakura (Oita Univ. Nursing and Health
Sciences) Visual attention following: From
exogenously to endogenously.

Richard W. Byrne (Univ. St. Andrews) How
primates learn novel complex skills: The
evolutionary origins of generative planning?

Young oral session 1

Chair: Shoji Itakura (Oita Univ. N&HS)

Satoshi Hirata (Kyoto Univ.) Understanding
of the others' knowledge in chimpanzees.

Duncan L. Castles (Univ. Tokyo) Using
anxiety to understand primate social
relationships.

Tatyana Humle (Univ. Stirling) Tool-use in
wild chimpanzees at Bossou, Guinea, West
Africa and in neighbouring communities.

Hiromi Kobayashi (Kyoto Univ.) Evolution
of human eye as a device for communication.

Masako Myowa-Yamakoshi (Kyoto Univ.)
Evolutionary foundation and development
of imitation.

Maura Lucia Celli (Kyoto Univ.) Learning
processes of tool use in captive chimpanzees.

Elsa Adressi (Inst. Psychol., CNR) Social
facilitation in the acceptance of novel
foods: Does what the other are eating
matter? An experiment in *Cebus apella*.

3月3日(於：犬山国際観光センター)

Plenary oral session 2

Chair: Tetsuro Matsuzawa (Kyoto Univ.)

Kazuo Okanoya (Chiba Univ.) Finite state
syntax in Bengalese finches: From birdsong
to the origin of language.

Shozo Kojima (Kyoto Univ.) Categorization

of sound, onomatopoeia and name of objects: Integration of human PET and chimpanzee language studies.

Charles T. Snowdon (Univ. Wisconsin) Social influences on primate vocal development and communication.

Plenary oral session 3

Chair: Masako Jitsumori (Chiba Univ.)

Iver H. Iversen (Univ. North Florida) Computerized drawing, sorting, and fingermaze tasks for chimpanzees.

Masayuki Tanaka (Kyoto Univ.) Visual perception of natural objects in chimpanzees (*Pan troglodytes*).

Edward A. Wasserman (Univ. Iowa) Same-different conceptualization by pigeons and baboons.

Young oral session 2

Chair: Kazuo Fujita (Kyoto Univ.)

Akihiro Izumi (Kyoto Univ.) Perception of sensory consonance of chords in Japanese monkeys.

Satoru Ishikawa (Kyoto Univ.) Auditory categorization in pigeons.

Kazuhide Hashiya (Univ. Tokyo) Auditory-visual intermodal recognition of human individuals by a chimpanzee.

Claudia Sousa (Coimbra Univ.) Food preference measured by tokens as exchange tools in chimpanzees.

Tessei Kobayashi (Univ. Tokyo) Rat's numerical ability explored: Identification of ordinal numbers (3rd-12th).

Dora Biro (Oxford Univ.) The use of numerical symbols and concepts by a chimpanzee (*Pan troglodytes*).

Lori Markson (MIT) Rapid learning in human infants and children.

3月4日 (於: 霊長研)

Plenary oral session 4

Chair: Masaki Tomonaga (Kyoto Univ.)

Hideko Takeshita (Shiga Pref. Univ.) Development of postural reactions and object manipulation in primate infants: Interconnection between postures and manual actions.

Fei Xu (Northeastern Univ.) Number concepts: Comparative and developmental approaches.

Dorothy M. Frigaszy (Univ. Georgia) Cognitive development across primates: Ethological considerations.

Young oral session 3

Chair: Masaki Tomonaga (Kyoto Univ.)

Brian Hare (Harvard Univ.) Chimpanzees know what conspecifics can and cannot see.

Deborah M. Custance (Univ. London) Social learning of artificial fruit processing in eight species of primates.

Lisa A. Parr (Emory Univ.) Matching-to-meaning: Emotional awareness in chimpanzees.

Nobuyuki Kawai (Kyoto Univ.) Short-term memory in symbol use in a chimpanzee.

Daisuke Kosugi (Kyoto Univ.) Recognition of causality in human infants.

Julie S. Johnson-Pynn (Berry College) The sources of skill in serializing nesting cups in children, apes, and monkeys.

3月5日 (於: 霊長研)

Plenary oral session 5

Chair: Shigeru Watanabe (Keio Univ.)

Kazuo Fujita (Kyoto Univ.) Perception of partly occluded objects in pigeons and primates.

Masako Jitsumori (Chiba Univ.) Visual categorization and prototype effects in pigeons.

Robert G. Cook (Tufts Univ.) Visual structure and intelligence in pigeons.

Plenary oral session 6

Chair: Yoshio Sakurai (Kyoto Univ.)

Joël Fagot (CNRS) Visual cognition in humans and baboons.

Masaki Tomonaga (Kyoto Univ.) Visual search by chimpanzees (*Pan troglodytes*).

Shigeru Watanabe (Keio Univ.) From comparative cognition to comparative cognitive science.

Tetsuro Matsuzawa (Kyoto Univ.) Chimpanzee intelligence in the laboratory and in the wild.

本COE国際シンポジウムでは、霊長類研究所の松沢哲郎を組織委員会委員長、友永雅己を副委員長として、学内外から小嶋祥三(霊長研)、子安増生(教育学研究科)、藤田和生(文学研究科)、渡辺 茂(慶応大学文学部)、実森正子(千葉大学文学部)らによって組織委員会を構成し、企画・運営にあたった。また、実務については霊長類研究所の田中正之、川合伸幸、明和政子、平田 聡、酒井道子らが会場での運営、渉外などを担当した。

今回のシンポジウムでは、認知の多様なあり方やわれわれヒトが持つ言語といった高次の認知機能の進化的起源を学際的に検討しようとする「比較認知科学(comparative cognitivescience)」の観点にたつて、内外の研究者を招き、計8つのセッションにおいて39題の講演がなされ、活発な議論が行われた。トピックは霊長類における社会的知性、トリや霊長類における音声コミュニケーションとそのヒト言語の進化とのかかわり、トリや霊長類における視知覚や視覚認知、ヒトを含む霊長類の認知・運動発達、など非常に多岐にわたるものであった。これらの講演から、比較認知研究という比較的若い研究領域における最近の研究の進展について様々な観点から総括することができた。また、本シンポジウムでは霊長類の研究者だけでなく、霊長類以外の動物を対象にした研究者やヒトの認知発達の研究者も多数招いた。さらに、実験室研究だけでなく、野外での研究にも重点をおき、これらの研究の間の相互理解を深め、新たな視点を導き出すであろう重要な議論がなされた。特に、欧米の研究者にはまださほど浸透していない日本の研究者による完成度の高い研究が数多く発表され、日本でのこの研究領域の質の高さが認識され、欧米の比較認知研究者との交

流が深められた。さらに、本シンポジウムの大きな特徴のひとつとして、内外の若手研究者を多数招き、彼らの研究発表の場を3セッション設けることにした。内容は荒削りではあるが、非常に興味深いものが多く、また、若手研究者間の交流や、より年長の研究者との間の直接的な議論の場を提供することが可能となった。

本シンポジウムでは、比較認知研究の内外の最前線で活躍している研究者、次代を担う若手研究者、そして日欧米の研究者が一同に会し、非常に活発かつ濃密で実りのある議論が展開された。おそらく、今後の比較認知研究にとって非常に大きなマイルストーンになったのではないかと考えている。

(文責：友永雅己)

3. 外国人研究員

氏 名：Suryobroto, Bambang

受入教官：濱田 稔

研究課題：霊長類指掌紋にみられる非対称生

招へい期間：1999年6月15日～2000年2月14日

氏 名：Han Jin-Soon

受入教官：竹中 修

研究課題：マカカ属サル¹のLDLレセプター遺伝子に関する研究

招へい期間：1999年5月25日～2000年2月24日

氏 名：Rakotoarisoa, Gilbert

受入教官：川本 芳

研究課題：遺伝的手法を用いたマダガスカル産原猿類の系統に関する研究

招へい期間：1999年6月10日～1999年10月9日

氏 名：Kay, Richard Frederick

受入教官：高井正成

研究課題：化石広鼻猿類の形態学的研究

招へい期間：1999年8月9日～1999年11月21日

外国人研究員(客員教授)

氏 名：Huffman, Michael Alan

所 属：人類進化モデル研究センター

期 間：1999年4月15日～1999年12月31日

4. 非常勤研究員 (氏名:採用期間)

川合 伸幸:1999年4月1日～2000年3月31日
嶋田 誠:1999年4月1日～2000年3月31日
高橋 弘之:1999年4月1日～2000年3月31日
橋本 千絵:1999年4月1日～2000年3月31日

5. 研究支援推進員 (氏名:採用期間)

伊藤 和子:1999年4月1日～2000年3月31日
梅田 恵子:1999年4月1日～2000年3月31日
梅田せつ子:1999年4月1日～2000年3月31日

小田 晶子:1999年4月1日～2000年3月31日
鈴木賀寿子:1999年4月1日～2000年3月31日
鈴木 益廣:1999年4月1日～2000年3月31日
長谷川洋子:1999年4月1日～2000年3月31日
松澤美津子:1999年4月1日～2000年3月31日
渋谷 道子:1999年6月1日～2000年3月31日
大蔵 裕子:1999年8月16日～2000年3月31日
加藤 朱美:1999年8月16日～2000年3月31日
平井百合子:1999年8月16日～2000年3月31日
堀尾由紀子:1999年8月16日～2000年3月31日
中野千枝子:1999年8月16日～2000年3月31日

V 共同利用研究

1. 概 要

昭和57年以来、研究課題として「計画研究」並びに「自由研究」を併置し、昭和62年度には「資料提供」を設置した。さらに平成6年度から「所外供給」を新たに設置し、これらに係る共同利用研究が実施されている。

「計画研究」とは、本研究所内推進者の企画に基づいて共同利用研究者を公募するもので、個々の「計画研究」は3～5年の期間内に終了し、まとめた成果を公表する。

「自由研究」とは「計画研究」に該当しないプロジェクトで、応募者の自由な着想と計画に基づき所内対応者の協力を得て、継続期間3年を目処に研究が実施されている。

「資料提供」とは、資料（体液、臓器、筋肉、毛皮、歯牙・骨格、排泄物等）のみを提供する共同研究として実施されている。

「所外供給」とは、本研究所以外の研究機関で行うことがより適切な研究のために、生体のサルを所外に供給するものである。

平成11年度の計画課題、応募並びに採択状況、研究会等の概略は以下のとおりである。

(1) 計画研究

(実施予定年度:課題推進者、下線は代表者)

1. 霊長類の発生・発達・加齢に関する研究

平成9年度～11年度:

林 基治・小嶋祥三・濱田 穰・中村克樹・
清水慶子・大蔵 聡

霊長類の発生・発達・加齢にともなう遺伝子、細胞、器官、組織における変化を調べるとともに知覚、認知、学習、行動等個体レベルの変遷過程を明らかにし、霊長類の個体発達の特徴を考察する。

2. ヒヒとマカクの比較生物学

平成9年度～11年度:

庄武孝義・川本 芳・平井啓久・相見 満・
松林清明

これまでの研究で霊長類の分類群間の遺伝距離は他生物群のそれに比べて著しく小さいことが指摘されている。ここでは、ヒヒとマカクに焦点をあて両者の遺伝学的、形態学的、生理学的等の特性を検索、比較し、上述した霊長類の特殊性が何に起因しているかを探る。

3. 霊長類などの寒冷適応に関する研究

平成10年度～12年度:

片山一道・川本 芳・相見 満・渡邊邦夫・
毛利俊雄

霊長類などの動物種が本来の生活環境を離れ